

# オンライン活用によるソーシャルワーク実習の可能性

灰谷 和代

東北公益文科大学総合研究論集第41号 抜刷

2021年7月30日発行

## 研究ノート

# オンライン活用によるソーシャルワーク実習の可能性

灰谷 和代

## 1. はじめに

2020年度、多くの社会福祉士養成校（以下、「養成校」とする）では、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響によるソーシャルワーク実習の対応が必要な状態となった。一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟（以下、「ソ教連」とする）が養成校を対象に実施した2020年6月末の調査<sup>1</sup>では、「予定通りの時期に実習を実施する」と回答したのは、回答のあった養成校121校のうち84校、69%であり、約3割の養成校では「実習先にあわせて個別に実習時期を調整する」、「実習時期を年度内の夏から秋や冬、来春等へ時期をずらす」等の検討をしていること、また、実習や代替実習の実施方針を決定する際、厚生労働省・文部科学省の通知や事務連絡<sup>2</sup>、実習先の意見・意向、ソ教連が発出したもの<sup>3</sup>を根拠や参考に行っていること等の回答があったことを報告している。

東北公益文科大学（以下、本学）では、通常の実習プログラムでは卒業年度である4年夏にソーシャルワーク実習を実施している。2020年度は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響によって、夏から秋以降へ実習受け入れの時期の変更を希望する実習先が複数あった。しかしながら、4年秋以降に実習期間を変更するとすると、卒業論文の提出や就職活動等を抱える学生自身の負担も大きいことや新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染状況など、先が読めない状況下で、秋以降に実習の開始時期をずらすことは、実習の実施が更に困難になる可能性も出てくることから、通常の実習期間範囲内に実習を開始し終了できる方法を検討した。結果、十分な感染予防等を配慮した上での

<sup>1</sup> 小森敦，中谷陽明，白澤政和，（2020）「新型コロナウイルスの感染拡大下におけるソーシャルワーカー養成教育の現状と課題－社会福祉士・精神保健福祉士養成課程への緊急調査から－」日本社会福祉学会第68回秋季大会e-ポスター発表 <https://www.jssw.jp/conf/68/pdf/E16-08.pdf>

<sup>2</sup> 文部科学省・厚生労働省（2020.2.28、2020.6.1）事務連絡「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」

<sup>3</sup> 一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟（2020.5.26）事務連絡「新型コロナウイルス感染症に伴う社会福祉士・精神保健福祉士養成の対応について」

現地での通常実習を実施したケース（以下、「現地実習」とする）、現地実習がやむを得ない状況で実施できずオンラインを活用した実習を通常実習の代替実習として実施したケース（以下、「オンライン実習」とする）、現地実習とオンライン実習を組み合わせで実施したケースとなった。

コロナ禍における実習先との連絡調整等は、通常以上に念入りに行い、特に代替実習であるオンライン実習の実現に向けた各実習先の実習指導者との打ち合わせは、それぞれ複数回に渡った。オンライン実習終了後、各実習先の実習指導者からは、コロナ禍の代替実習という位置づけだったものの、オンライン実習を実施することで思いがけない発見や今後の実習の活用に関わり付く実践ができたことが報告された。本研究ノートでは、オンライン実習の実践内容の整理とオンライン実習に取り組んだ実習先指導者へのインタビュー調査の結果からオンラインを活用したソーシャルワーク実習の可能性について考察する。

## 2. 研究目的

2020年度に本学で実施したコロナ禍における実習実践のうち、オンライン実習の実践から、オンライン活用におけるソーシャルワーク実習の可能性について考えることを目的とする。

## 3. 研究方法

### （1）研究対象

2020年度に本学で実施したコロナ禍における全てのソーシャルワーク実習実践のうち、オンライン実習による実習実践の内容を対象とする。

### （2）研究方法

#### ①オンライン実習の実践状況について

2020年度、本学におけるオンライン実習の実践状況を、本学で社会福祉士養成課程を担う公益学部公益学科の地域福祉コースの会議録や実習報告書<sup>4</sup>、実習先の実習指導者との打ち合わせの記録等を整理してまとめる。

#### ②オンライン実習の実際

---

<sup>4</sup> 東北公益文科大学公益学部地域福祉コース（2021）「2020（令和2）年度社会福祉士実習報告書」

オンライン実習を実施した実習先指導者への半構造化インタビュー調査によって、実習先で実践した実習プログラムの実際やオンライン実習のメリット・デメリット等をまとめる。

### ＜インタビューガイド＞

- ・実際に実施したオンライン実習の内容について
- ・オンライン実習のどの部分に関わったか
- ・オンライン実習で工夫した部分
- ・オンライン実習で苦慮した部分
- ・通常の現地実習と比較したオンライン実習の利点と欠点について
- ・オンライン実習の有用性および課題について
- ・その他

### （３）倫理的配慮

個人が特定されないように本調査で知り得た情報の中で不要な情報は全て削除する等、十分に配慮する。インタビュー調査は、東北公益文科大学の研究倫理審査を申請し、承認（公倫-20-03）を得て実施している。

## ４．結果と考察

### （１）オンライン実習の実践状況

#### ①オンライン実習の実践までの経緯

2020年度、本学の実習は全て現地実習で実施する予定だったが、実習受け入れ期間の変更を希望する実習先が複数あった。本学の実習プログラムでは、学生の卒業年度（４年）での実習が実施されていたため実習期間をずらすことが困難だった。そのため、通常期間内にやむを得ず現地実習が実施できなかった場合に、オンラインを活用した実習「オンライン実習」に取り組むことで通常実習の代替実習とした。本学のオンライン実習では、通常実習と同様、実習先は大学と実習契約書を交わし、実習先指導者が主導となる実習を実践した。当初、本学では課題解決型プログラムのオンライン実習を代替実習として実施することが進められていたが、厚生労働省・文部科学省の通知や事務連絡、ソ教連からの諸連絡を基に、実習

先の意見・意向、実習担当教員テキスト<sup>5</sup>や実習指導者テキスト<sup>6</sup>を参考に、通常実習の実習プログラムにある「職場実習」「職種実習」「ソーシャルワーク実習」に沿ったオンライン実習プログラム案（たたき台）を組み立て、各実習先との検討を重ねた<sup>7</sup>。

現地実習が実施できない実習先（状況によって実施できなくなる可能性のある実習先を含む）の中で、オンライン実習のプログラムに取り組んでも良いと協力を得られた実習先は3か所（内訳：高齢者2、病院1）で、うち1か所（高齢者）は、実習期間中の新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染状況に応じた対応をするために、施設内の事務所等からオンラインを介して利用者とかわる（家族面会と同じ方法を用いる）等の方法を考えていたが、実習期間中は、比較的、感染状況が落ち着いた時期となり、実習日誌の提出等の一部のみがオンライン対応となった。また、当時、オンライン環境が整わず、オンライン実習が実施できない実習先も複数あった。そのため、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が発生する以前から、オンラインを活用した福祉実践をすでに実施していたA事業所（県外：障がい児者支援事業所）に協力を依頼して実習先を確保した。A事業所には、オンライン実習プログラムの具現化をめざすために、すでにA事業所が実施していたオンライン活用による福祉実践方法の情報提供を受けた。A事業所から得られた情報は、オンライン実習に取り組む他の実習先のオンライン実習のプログラムの手がかかりとなった。

## ②オンライン実習の実践状況

オンライン実習を実践および準備していた実習先の状況をまとめたものが表1である。

A事業所では、同時期に3つの実習形態、オンライン実習のみ、他施設で現地実習後A事業所でのオンライン実習、A事業所のみでの現地実習（A事業所近隣在住の実習生の受け入れで一部、施設内オンライン実習有）を

<sup>5</sup> 一般社団法人日本社会福祉士養成協会（2009初版、2015第2版）『相談援助実習指導・現場実習 教員テキスト』、中央法規出版

<sup>6</sup> 公益社団法人日本社会福祉士会編（2011）『社会福祉士実習指導者テキスト』、中央法規出版

<sup>7</sup> 灰谷和代（2020）「コロナ禍におけるソーシャルワーク実習の対応ーオンライン実習プログラムの検討ー」東北公益文科大学総合研究論集第39号、99-107頁

表1：オンライン実習を実施した実習先

実習先	分野	実習形態 ※	事前訪問	出席管理	実習日誌
A事業所	障がい	・オンライン実習 ・現地実習(他施設)+オンライン実習 ・現地実習(一部施設内オンライン実習)	オンライン	オンライン	オンライン
B施設	高齢者	・オンライン実習 ・オンライン実習+現地実習	オンライン	オンライン	オンライン
C病院	病院	・現地実習+オンライン実習	現地	－	－
D施設	高齢者	・施設内オンライン実習 ※準備のみで実施されず	現地	－	オンライン

※本学以外の実習生対応を含む

受け入れていた。職場実習や職種実習として、オンライン上での法人説明、法人内の各事業説明、各職種の業務説明、Webカメラを介した各事業の施設見学を実施した。また、実習先地域の状況説明を受けた後、各実習生の居住地や本学周辺の状況を各自で調べて実習先の所在地域を比較、本学周辺の案内動画を実習生が作成し実習先へ発信した。ソーシャルワーク実習としては、個別支援計画の作成方法を説明を受けた後、対象者を決定、実習生はWebカメラを介して対象となる利用者の様子を確認したり、オンライン上で対象者本人や対象者と関わりのあるスタッフと面談したりして対象者の情報を収集し整理して計画を立てた。そして、実習生が立てた支援計画をプレゼンテーションすることで職員や他の実習生に計画内容を共有し、対象者の支援について検討した。他にも会議や研修会等にもオンライン上で同席、利用者を対象としたオンライン企画を計画し実践した。オンライン実習期間中は、主に学内の教室で実習を実施したが、実習指導者の指示に従い、学外に出てフィールドワークによる現地調査や動画撮影をする日もあった。事前訪問、出席管理、実習日誌の提出、すべてオンライン対応となった。

B施設では、A施設と同様、職場実習・職種実習は、オンライン上で施設、各事業、各業務の説明を受け、Webカメラによる見学、その他実習指導者から指示のあった内容の調べ学習に取り組んだ。ソーシャルワーク実習では、オンライン上で利用者と離れて暮らす家族との面会や訪問診療に同席、家族から利用者宛のビデオレターの作成と編集、ケースの検討、

Zoomのホワイトボード機能を活用した利用者とのかかわり、施設内行事で使う動画の撮影および編集、オンラインによる企画を計画し実施した。オンライン実習中は、A事業所と同様、主に学内の教室で実習を実施したが、実習指導者の指示に従って、学外に出てフィールドワークによる現地調査や動画撮影等も実施した。事前訪問、出席管理、実習日誌の提出、すべてオンライン対応となった。

C病院では、現地実習がメインではあるが、実習期間の一部にオンライン実習を上手く組み合わせた実習プログラムを計画し実践した。現地で学べる内容とオンラインを介しても学べる内容を上手く組み合わせて、職場実習・職種実習・ソーシャルワーク実習を実践している。オンライン実習中は、A事業所やB施設と同様、主に学内の教室で実習を実施したが、現地実習に赴くことが多く、オンライン実習は現地実習の補填的な役割を担っていた。現地実習の時間の方が多く、事前訪問、出席管理、実習日誌の提出は、オンライン対応にはならなかった。

D施設については、結局、オンライン実習に至らなかったが、高齢者分野の施設だったため、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染状況によって、いつでもオンライン実習に切り替えて対応できるように準備していた。

オンライン実習を実践するにあたって、実習先との契約書や実習先の登録は通常実習と同様、紙文書を作成し郵送によって取り交わしたが、実習計画書や実習日誌等は、Word (Microsoft2019) 等で電子データを作成して、オンライン対応できるようにしていた。オンライン実習だけでなく、現地実習でも電子データを活用する実習先もあり、オンライン実習のために整えた環境が、現地実習にも影響されICT機器の活用やDXが進んだ（表2）。

## **（2）オンライン実習の実際**

A事業所のみが同時期に3つの実習形態を実践していたことから、通常の現地実習とオンライン実習との比較を考え、まず、A事業所の実習指導者へオンライン（Zoom）を活用した半構造化インタビュー調査を実施した。

### **①調査実施日**

2020年10月15日（半構造化インタビュー調査：60分程度）

表2：実習関係書類の状況

実習関係書類	通常	オンライン実習	現地実習
契約書	紙ベース (電子データを印刷)	紙ベース (電子データを印刷)	紙ベース (電子データを印刷)
実習登録関係書類			
学生個人票	紙ベース (手書き)	紙ベース (手書き)	紙ベース (手書き)
実習計画書		電子データ (メール添付)	電子データ (印刷し提出)
実習日誌		電子データ ⇒ s 4システムで提出	原則、紙ベース (手書き) ※一部、電子データを印刷
出勤簿		s 4システム ⇒ 紙ベース提出	紙ベース
実習報告書	電子データ	電子データ	電子データ

## ②調査対象者

A事業所の実習指導者（社会福祉士）

※A事業所は、社会福祉法人の障害児者支援事業所である。障害児デイサービス、生活介護事業、障害児者ヘルパー派遣事業、共同生活援助事業、相談支援事業、就労継続支援B型事業、短期入所事業等を運営している。

## ③調査の結果

インタビュー調査の結果とA事業所から提供のあったオンライン実習を実践した後の振り返り記録を基にまとめた。

### I. オンライン実習の指導方法について

- ・1日1回以上、Zoomをつないで指導する。  
(予定確認、直接指導、動画の補足説明、進捗確認、学生の様子確認等)
- ・ワークをしている時の進捗確認はZOOM、LINE、メールで確認する。

### II. オンライン実習による1日のスケジュール

<ul style="list-style-type: none"> <li>・出勤記録</li> <li>・朝礼（本日の予定の確認等） ※実習先とリアルタイムによるオンライン</li> <li>・課題やテーマの確認と課題指示等の指導</li> </ul>	<p>[活用ツール (表3参照)]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ s 4</li> <li>・ Zoom</li> <li>・ Zoom、LINE、YouTube</li> </ul>
--	--



<ul style="list-style-type: none"> <li>・本日の活動（調べ学習・動画視聴・フィールドワーク・動画撮影・インタビュー・支援計画・企画の立案と実践等）</li> <li>・進捗の確認と助言</li> <li>・実習日誌の記入（Word）</li> <li>・終礼（明日の予定の確認）</li> <li>・退勤記録</li> <li>・日誌の提出・返却</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Zoom</li> <li>・ s 4</li> </ul>
---	---

### Ⅲ. オンライン実習の実践内容について

<p><b>【現場実習】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・理事長講話（法人理念、施設概要、権利擁護など）</li> <li>・実習先の支援で大切にしていることの学習</li> <li>・各事業部（生活介護、就労継続支援B型、放課後等デイサービス、ヘルパーステーション、グループホーム、事務局、相談支援）の紹介動画視聴、オンライン見学、質疑、利用者との話など</li> <li>・山形県内（居住地や大学周辺）について調べる</li> <li>・山形県内（居住地や大学周辺）の社会資源を調べる</li> </ul> <p><b>【職種実習】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・相談員向けの研修参加（相談員のつながりや連携を知る）</li> <li>・福祉で働くことについて</li> <li>・チーム支援について</li> <li>・防災研修</li> <li>・自立支援協議会子ども部会への同席（市の障害福祉計画に向けて、アンケートの集約）</li> <li>・サポートブックを拡げる活動をしている保護者団体から、サポートブックの説明や保護者からの話を聞く</li> </ul> <p><b>【ソーシャルワーク実習】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・プランニング</li> <li>・ニーズ整理（ニーズ整理表を用いて）の説明</li> <li>・自分のプラン作成</li> </ul>	<p><b>【活用ツール（表3参照）】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ Zoom</li> <li>・ YouTube</li> <li>・ LINE</li> <li>・ 学内ワーク後にZoomによる学習状況を確認</li> <li>・ Zoom</li> <li>・ YouTube</li> <li>・ Zoom</li> <li>・ Zoom</li> <li>・ 学内ワーク</li> </ul>
--	--

<ul style="list-style-type: none"> <li>・インタビュー事前学習（個人情報取り扱い、守秘義務、指導者のインタビュー場面の見学等）</li> <li>・利用者インタビュー</li> <li>・スタッフインタビュー</li> <li>・ニーズ整理</li> <li>・プラン作成</li> <li>・プランをスタッフにプレゼンする</li> <li>・プランを利用者本人にプレゼンする</li> <li>・企画準備（利用者へのアンケート、備品の準備など）</li> <li>・企画の実行</li> <li>・解決できない課題について、地域に提案できるものを考える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Zoom</li> <li>・ LINE</li> <li>・ 学内ワーク</li> <li>・ Zoom</li> </ul>
--	---

#### Ⅳ. オンライン実習を実施して良かった点と良くなかった点について

【良かった点】

- ・複数の実習生による実習だったので、オンラインでつながっていない時に、意見を言い合ったり、アウトプットしたりする時間が持てた。
- ・実際のケースに没頭せず、俯瞰的に捉えることができていた（説明していないところのつながりについて、質問が出ていた）。

○ 例年の通常実習と比較して

(例年は一通り事業部の見学後、生活介護事業所に入り込んでの実習)

- ・ 座学やワークなど、学生自身が取り組んだり調べたりする時間を長くとれた。
- ・ 外部の人の話を聴く機会が多く取れた。
- ・ 地域資源についての調べや比較ができた。
- ・ 利用者にとっても良い経験になった（利用者の新たな一面も発見できた）。
- ・ オンライン（コロナ禍）ならではの企画ができた。
- ・ 学生とLINEでつながれたので、予定変更等のやりとりがスムーズにできた。
- ・ YouTubeで部署説明をアップするなど、実習先として今後のベースになるものができて良かった。

【良くなかった点】

- ・オンラインでつないでいる時間しか実習生は利用者やスタッフと関われなかった。
- ・利用者と関わる時間が少なくなる、画面に映っていない時の利用者やスタッフの業務・姿勢が見えない、いろいろなスタッフからの聴き取りやふとしたエピソードなどをきく機会が持てない。

- ・ケース記録の閲覧ができなかった。
- ・プランや企画を立てる時に、実情に合ったプランを作りにくい。
- ・オンラインをつなぐための時間や予定の調整が必要だった。(Wi-Fi環境にいる必要があった)
- ・オンラインで現場とつながる時に、「この時間につながます」が難しかった(現地にいると、その間、利用者の様子を見られたり、スタッフの様子を見学できたりする)
- ・定時の朝礼以外は、一回ずつZOOMを設定してIDとパスワードの送信が必要だった。
- ・指導者やスタッフに急な予定が入った時などに、利用者さんと一緒に過ごしてもらったり、ケース記録を読んでももらったり、実習生一人で進められることが少なく、指導者側に準備できるものがないと学生が何もすることがない状態になった。

## V. その他

- ・今回の回数(時間数)以上にオンラインでつながることは難しい。当初は、時間と学習内容の計画を立てていたが、学びの内容により(プラン作成の段階等)、学生の進捗に合わせた対応が必要になった。今回は指導者が相談員のため、ある程度の時間の融通はできたが、現場スタッフでは対応が難しいと思われる。

### ○実習協力者からの感想等

- ・画面から学生にじっと見つめられることで、真剣に話を聴いてくれる姿勢があり話しやすかった。
- ・反応がわかりづらく、話しにくかった。
- ・学生からの質問がしっかりしていた。
- ・的を射た質問で、説明していないところまで考えた質問だった。
- ・説明後、イメージできているかどうか気になった。

A事業所が今回のオンライン実習中に活用したオンラインツールは、Zoom、LINE、YouTube、s4、E-mailである。各ツールの説明と活用した場面をまとめたものが表3である。A事業所は、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の発生前から、オンラインツールを活用していたため、各ツールの特性を上手く活かした取り組みを実践していた。

表3：オンラインツール（活用ツール）

ツール名	ツールの説明	活用した場面
Zoom	リアルタイムによるオンラインでセミナーやミーティングを開催するのに開発されたシステム	朝礼、終礼、実習指導者等からの説明や指導、講話、利用者との交流、プレゼンテーション、企画の実践、進捗確認、等
LINE	個人間（1対1）やグループ間でのコミュニケーションツール ※今回のオンライン実習実践では、自由に友達追加できないオープンチャット機能を活用	緊急連絡の発信 質問の受付 進捗確認
YouTube	あらかじめ撮影・録画された動画や音楽（音声）をオンラインで発信するシステム	各事業紹介 研修会
s4	本学の学内SNSシステム（広瀬，2016） <sup>8</sup>	出席管理、実習日誌の提出・返却
E-mail	コンピュータネットワークを使用して、情報等を交換するシステム	個別の質問や相談等の受付 進捗確認

### （3）考察

本学では、多くの養成校と同様、厚生労働省・文部科学省の通知や事務連絡、ソ教連の各文書、実習先の意見や意向、大学の方針等を根拠に実習および代替実習等の実施方法を考えて、オンラインを活用した実習プログラムを実習先指導者と共に検討し実践した。ソ教連の6月末の調査報告では、代替実習の想定について回答のあった養成校のうち62%が学内実習で対応すると回答しており、その代替教育プログラムの内容として、86%の養成校が事例学習、71%の養成校が実習記録等に相当する記録の作成や映像教材の活用を挙げており、実習施設とオンライン接続は49%の養成校だった。また、2020年9月29日には、ソ教連によって「新型コロナ対応：実習中止に伴う実習代替プログラムに関する緊急オンライン集会」が開催された。この際、養成校3校の実習代替プログラムに関する報告があったが、各養成校や実習担当教員と普段から馴染みのある実習先や実習指導者等の協力や連携による実習内容が実習代替プログラムに組み込まれているも、養成校の実習担当教員が中心になって構築した実習代替プログラムによる実践報告であり、本学のように通常実習と同様に実習先と実習契約手続きを行い、実習期間中に実習先の実習指導者が主指導となるオンライ

<sup>8</sup> 広瀬雄二（2017）「超小型SNS「s4」による教育用情報システム導入過程の効率化」東北公益文科大学総合研究論集第33号、35-55頁

ンを活用した実習代替プログラムの実践報告はなかった。本学は他の養成校と同様に実習や代替実習等を検討し実施してきたのだが、結果として、他の養成校とは異なる代替実習の実践となったようである。

通常の現地実習では、学生が養成校の実習担当教員のスーパービジョンを受けながら実習計画書を作成して実習先に提出する。実習先の実習指導者は、実習生である学生から提出された実習計画書を基に実習プログラムを構築し実習を開始する。そして、実習期間中は、実習現場で展開される日々の実習実践のスーパービジョンを実習現場にいる実習担当者が実習生に行く。養成校の実習担当教員は、実習前や実習後だけでなく、実習期間中も実習生に対してスーパービジョンを行うが、実習期間中は実習巡回や帰校日の実施日にスーパービジョンを行う。一連の実習プロセスにおいて、実習先の指導者と養成校の実習担当教員の連携は不可欠だが、実習期間中は実習先の実習指導者が実習指導の中心になることから、本学の実践は、より通常の現地実習に近い実習プログラムになったと考えられる。また、本学のオンライン実習のプログラムでは、オンライン上とはいえ、A事業所もB施設もリアルタイムで実習指導者等からの指導や利用者とのコミュニケーションを取る機会やリアルタイムで企画を実践する機会があった。この点についても、より通常の現地実習に近い実習プログラムだったと考えられる。

池埜（2021）は、「厚生労働省の実習認可基準をコンピテシーに置き換えて、柔軟でクリエイティブな代替実習を考案していく道は検討に値する」と考えた。そして、試案として挙げた「6つのコンピテシー」<sup>9</sup>とA事業所での実践を照らし合わせると、「1）倫理・価値・専門職性の理解」は、現場実習の「理事長講話」等や職種実習の「相談員向け研修」等で実施されていた。「2）アセスメント力の向上（ミクロ・メゾ・マクロレベル）」は、ミクロレベルの部分はソーシャルワーク実習の「実習のプランニング」等の部分で、メゾレベルの部分は職種実習の「サポートブックを広げる活動をしている保護者団体」等の部分で、マクロレベルの部分は職種実習の「自立支援協議会子ども部会見学」等

---

<sup>9</sup> 池埜聡（2021）「新型コロナウイルス感染所（COVID-19）に伴うソーシャルワーク実習への対応策－北米スクール・オブ・ソーシャルワークの朝鮮から見えてくるもの－」関西学院大学人間福祉学部研究会、『Human welfare』第13巻 第1号 67-80、P78から「6つのコンピテシー」を引用

の部分で関連する内容に触れている。「3）支援計画力の向上」は、ソーシャルワーク実習の「プランニング」や「企画準備・実施」等の部分で実践している。「4）関係形成力の向上」は、ソーシャルワーク実習の「利用者やスタッフへのインタビュー」の部分で実践している。「5）組織分析力の向上（職場・職種実習、職種間連携、地域携）」は、現場実習の「各事業部紹介」等や職種実習の「自立支援協議会子ども部会見学」で触れている。「6）多様な実践方法の理解」は、オンラインを介した実習実践そのものが多様な実践方法のひとつであり、実習実践全体を通して理解できるものがある。以上から、本実践は、概ね「6つのコンピテシー」を大きく逸脱せずに実施できたといえるだろう。

本実習実践は実習プログラム案（たたき台）の作成から始まり、各施設への協力依頼、そして各施設との連絡調整やシステムテストを含む事前準備など、実践までの道のりが長く、普段以上に実習先の実習指導者との連絡調整が必要だった。各実習先の実習指導者にも普段以上の負担をかけた。コロナ禍だからこそ止むを得ず、乗り切ったところもあるかもしれない。時間をかけた分、実習担当教員も実習指導者も学生も互いに学べることも多かったが、今後、これらを全ての実習先に求めるのは各実習先の状況にもよるが、例えば実習指導者が1名しかいない実習先等では、負担が大きい。

本実習を受け入れた実習先の実習指導者から、本実習プログラム実践の良かった点として、今回の実習プログラムや実習準備を通じて実習先として実習に向き合い実習指導のベースになるものを改めて構築することができたこと、実習生自身が実際のケースに没頭せず俯瞰的に捉えることができていたこと、オンラインだからできた取り組みがあった等の良い点が挙げられた一方で、通常の現地実習では、学生が現場に入るだけで実習がスタートできるが、オンライン実習では、オンラインをつながらないと実習が始まらない、実習現場にある資料（ケース記録等）が閲覧できない、実習生は画面に映る範囲での情報しか得られないため、プランや企画を立てる時に現地実習を実施している学生と違って実状に合ったプランを立てにくい等の良くなかった点が挙げられた。

本実習実践によって、今まで実現できていなかった実習日誌のICT活用等のDXは進んだ。また、本実習の実践を基に、今後もオンラインの特性を活か

した実習実践や演習授業に活用ができるだろう。本実習に取り組んだ学生からも「オンライン実習でも十分に学べた」という声もあった。しかしながら、たとえ多くの時間と労力を費やし現場実習に近いオンライン実習プログラムを準備し実践できたとしても、現地での実習でしか得られない学びがあることを、決して忘れてはいけない。オンラインを活用したソーシャルワーク実習の実践は、福祉実践現場におけるDXが進むことも考えれば、取り入れていく必要があると考えられるが、現場での直に見て触れ合う、人と人とのコミュニケーションによる学びもまた大切にしていきたい。

## 5. おわりに

2021年度入学生から、社会福祉士養成の新カリキュラムがスタートしている。新カリキュラムでは、実習内容が充実し実習時間が180時間に加えて60時間追加され計240時間となる。未だ収束を迎えていない新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響が、どこまで続くか先の見えない中でのスタートである。本研究ノートは、ひとつの実践の報告に過ぎない。他の養成校や施設・機関の取り組みも確認しながら、更にソーシャルワーク実習の実践研究を進め発信していきたい。

## 謝辞

本研究にご協力いただいた実習先の実習指導者の方をはじめ関係職員の方々に、心から感謝申し上げます。